

# 白居易「微之を祭る文」 訳注

諸 田 龍 美

## 一、解題

「びし微之を祭る文」は、大和五年（八三二）、白居易六十歳の作品であり、同年に逝去した親友げんしん元稹（微之は、字）の棺が、洛陽の白居易邸に到着した際、元稹の霊前に献げられた祭文である。

白居易が、生前の元稹と最後に出会ったのは、大和三年（八二九）の冬、白居易五十八歳、元稹五十二歳の時であった。その約二年後、大和五年（八三二）の七月に、元稹はがく鄂州（湖北省武昌県）において逝去し、その棺が白居易の住む洛陽に到着したのは同年十月のことであった。

元来、弔辞には、故人に対する衷情が、哀切を極めた文体で記されるものである。白居易のこの祭文も、その代表的な一例であって、ここには、通常の文学作品を越えた真情が、赤裸々に表現されている。それは白居易の生涯において最も感情の高揚した、劇的な悲しい瞬間のひとつであり、それだけに、元・白の希有な友情を通して、人間の普遍的な本質の一面を、垣間見ることができるといえる。

本稿は、『白氏文集』巻六十九（馬元調本。那波本では巻六十）所収の祭文「祭微之文（微之を祭る文）」（花房番

号二九三四)に、詳細な訳注を施したものであり、日本語による注釈としては、初の試みとなる。底本には、今回は馬元調本を使用した。また、理解の便宜のため、全体を七つの段落に区切り、【一】によって示した。

## 二、本文

【一】 維大和五年歲次辛亥、十月乙丑朔、十日辛巳、中大夫・守河南尹・上柱國・晉陵縣開國男・食邑三百戶・賜紫金魚袋白居易、以清酌庶羞之奠、敬祭于故相國・鄂岳節度使・贈尚書右僕射元公微公。

【二】 惟公家積善慶、天鍾粹和。生爲國禎、出爲人瑞。行業志略、政術文華、四科全才、一時獨步。雖歷將相、未盡謨猷。故風聲但樹於蕃方、功利不周於夷夏。噫。此蒼生之不多遇也、在公豈有所不足耶。詩云、「淑人君子、胡不萬年」。又云、「如可贖兮、人百其身」。此古人哀惜賢良之懇辭也。若情理憤痛、過於斯者、則號呼壹鬱之不暇、又安可勝言哉。

【三】 嗚呼微之。貞元季年、始定交分。行止通塞、靡所不同、金石膠漆、未足爲喻。死生契闊者三十載、歌詩唱和者九百章、播於人間、今不復敘。至於爵祿患難之際、寤寐憂思之間、誓心同歸、交感非一。布在文翰、今不重云。

【四】 唯近者公拜左丞、自越過洛、醉別悲咤、投我二詩云、「君應怪我留連久、我欲與君辭別難。白頭徒侶漸稀少、明日恐君無比歡」。又曰、「自識君來三度別、這迴白盡老髭鬚。戀君不去君須會、知得後迴相見無」。吟罷涕零、執手而去。私揣其故、中心惕然。

【五】 及公捐館於鄂、悲訃忽至、一慟之後、萬感交懷。覆視前篇、詞意若此。得非魄兆先知之乎。無以繼寄悲情、作哀詞二首、今載於是、以附奠文。其一云、「八月涼風吹白幕、寢門廊下哭微之。妻孥親友來相弔、唯道皇天無所知」。

其二云、「文章卓犖生無敵、風骨精靈歿有神。哭送咸陽北原上、可能隨例作埃塵」。嗚呼微之。始以詩交、終以詩訣。絃筆兩絕、其今日乎。

【六】 嗚呼微之。三界之間、孰不生死。四海之內、誰無交朋。然以我爾之身、爲終天之別。既往者已矣、未死者如何。【七】 嗚呼微之。六十衰翁、灰心血淚、引酒再奠、撫棺一呼。佛經云、凡有業結、無非因集。與公緣會、豈是偶然。多生已來、幾離幾合。既有今別、寧無後期。公雖不歸、我應繼往。安有形去而影在、皮亡而毛存者乎。嗚呼微之。言盡於此。尚饗。

### 三、訓 讀

【一】 維れ大和五年、歲次辛亥、十月乙丑の朔、十日辛巳、中大夫・守河南尹・上柱國・晉陵縣開國男・食邑三百戸・賜紫金魚袋の白居易、清酌庶羞の奠を以て、敬んで故相國・鄂岳節度使・贈尚書右僕射の元公微之を祭る。

【二】 惟ふに公は家善慶を積みて、天粹和を鍾む。生れて國禎と爲り、出でて人瑞と爲る。行業志略、政術文華、四科全才、一時に獨歩す。將相を歷すと雖も、未だ盡くは謨猷せず。故に風聲但だ蕃方に樹つて、功利夷夏に周ねからず。噫、此れ蒼生の大遇ならざるなり、公に在りては豈に足らざる所有らんや。詩に云ふ「淑人君子、胡ぞ萬年ならざる」と。又云ふ「如し贖ふ可くんば、人其の身を百にせん」と。此れ古人賢良を哀惜するの懇辭なり。情理に憤痛すること、斯れに過ぐるが若き者は、則ち號呼壹鬱の暇すらあらず、又安んぞ勝けて言ふべけんや。

【三】 嗚呼微之よ。貞元の季年に、始めて交分を定めたり。行止通塞も、同じからざる所靡く、金石膠漆も、未だ喩へと爲すに足らず。死生契闊する者三十載、歌詩唱和する者九百章、人間に播せり、今復た敍せず。爵祿患難の

際、寤寐憂思の間に至りても、心に誓ふこと歸を同じくし、交も感ずること一に非ず。布きて文翰に在り、今重ねては云はず。

【四】 唯だ近者公左丞を拜し、越自り洛に過ぎり、醉別に悲吒して、我に二詩を投じて云ふ「君應に怪しむべし我が留連すること久しきを。我君と辭し別れんと欲して難し。白頭の徒侶漸く稀少、明日恐くは君此の歡無からんと。又曰く「君を識りて自り來、三度別れ、這廻は白盡す老髭鬚。君を戀ひて去らず君須く會すべし、知り得たり後廻は相見ること無なからん」と。吟じ罷みて涕零ち、手を執りて去れり。私かに其の故を揣るに、中心惕然たり。

【五】 公館を鄂に捐つるに及びて、悲計忽ち至り、一働の後、萬感交も懷けり。前篇を覆視するに、詞意此くの若し。魄兆先ず之を知るに非ざるを得んや。以て悲情を繼寄すること無くして、哀詞二首を作れり、今是に載せ、以て奠文に附す。其の一に云ふ「八月の涼風 白幕を吹き、寢門の廊下に微之を哭す。妻孥親友來りて相弔ふ、唯だ道ふ 皇天知る所無し」と。其の二に云ふ「文章は卓犖にして生くるに敵無く、風骨は精靈にして歿して神有り。哭し送る 咸陽北原の上、能く例に隨ひて埃塵と作るべし」。嗚呼微之よ。始めには詩を以て交はり、終はりには詩を以て訣る。絃筆兩つながら絶ゆるは、其れ今日か。

【六】 嗚呼微之よ。三界の間、孰か生死せざらん。四海の内、誰か交朋無からん。然じも我と爾の身を以て、終天の別れを爲す。既に往く者は已みなんも、未だ死せざる者は如何せん。

【七】 嗚呼微之よ。六十の衰翁、灰心血涙、酒を引きて再び奠り、棺を撫して一たび呼ぶ。佛經に云ふ「凡そ業結有るは、因集に非ざるは無し」と。公と縁會すること、豈に是れ偶然ならんや。多生より已來、幾（いくた）びか離れ幾たびか合へる。既に今別有り、寧ぞ後期無からん。公は歸らずと雖も、我は應に繼ぎて往くべし。安んぞ形去りて影在り、皮亡びて毛存する者有らんや。嗚呼微之よ。言此に盡きぬ。尚くは饗けよ！

## 四、通 釈

【一】 大和五年（八三二）辛亥の年、十月乙丑の朔、十日辛巳に、中大夫・守河南尹・上柱国・晋陵県開国男・食邑三百戸・賜紫金魚袋の白居易は、清酒と諸々の馳走をお供えし、謹んで故相国・鄂岳節度使・贈尚書右僕射の元公微之をお祭りする。

【二】 思えば元公は、その家が善行を積み重ねたおかげで、天が純粋な和氣をあつめたのであり、そのような人物が生れ出たことは国家の幸いであり人事の吉兆であった。品行やころざし、政治手法や文才に優れ、四科に万能の才を發揮して、一時代に卓越したのである。節度使と宰相職とを歴任したが、そのはかりごとを十全に施すことはできなかった。それゆえ、よき風俗教化は未開の地に行われたのみであつて、その功績と利益が、広く夷狄と中国とに行き渡ることにはなかつたのである。ああ、これは人民にとって不運であつたが、決して公に至らない点があつたからではない。『詩経』に「善人君子は、どうして千万年も榮えないことがあろうか」といい、また、「もし身代わりになるなら、人々は、その身を百にしても代わりたいたいと思う」とある。これは、古人が善良な賢人を哀惜した真心からの言葉である。（わたしが）人情と道理のうえから（公の死を）憤り痛むことが、（詩経の）古人以上であるような事柄については、大声で泣き叫び専ら鬱ぎ込む暇すらないのであるから、どうしてその全てを残らず言葉にすることができようか。

【三】 ああ、微之よ。君とは貞元の末年に、はじめて交際する運命となつた。以来、行くも止まるも、幸も不幸も、同じでないことはなく、金石や膠漆すら、二人の堅く離れぬ交情を喩えるには不十分なほどであつた。死ぬも生きるも苦勞を共にしようとして誓つてから三十年、唱和した歌詩は九百首に及ぶが、これらは世間に広く知られているから、

今繰り返しては述べない。また、たとえ地位や身分が危殆に瀕した際でも、寝ても覚めても憂い悩む時でも、心に誓う内容は結局二人とも同じであり、（離れていても）互いの心が感じ合う不思議も一度や二度ではなかったが、これも文章として公開しているから、今重ねては言わない。

【四】ただ近頃、公は、尚書左丞を拝受して、越州から（長安へと向かう途上）洛陽に立ち寄った際に、別れの宴席で酔って歎き悲しみ、わたしに二首の詩を差し出してこう述べたのであった。「君はきっと私が長く立ち去ろうとしないことを訝しく思つていよう。私は君に別れを告げようにもできないのだ。白髪頭の朋友は次第に数が少なくなった。（今別れたら）明日以降、恐らくもう二度と君と会う楽しみはあるまい」と。また、いう「君と知り合つてから三度別れを体験したが、このたびは年老いて互いのひげも真つ白だ。君を恋い慕つて立ち去らぬわが心境を理解してくれたまえ。わかっているのだ、もう次回、互いに会うことは無い」と。詩を吟じ終えると涙を落とし、わが手を握つて、立ち去つたのであった。ひそかにそのわけを推し量つてみるに、心中不安で恐ろしくなった。

【五】（その約二年後に）公が鄂州で逝去した際には、悲しい訃報がにわかに着し、ひたすら慟哭した後は、万感が次々と胸にこみ上げてきた。以前（公が詠じたこ）の詩篇と照合してみると、その言葉通りになったのであった。たましいが予兆で先にわかっていたのだとしか考えられまい。悲しみの情を続けて詠めることはさけて、哀詞二首を作つたので、今ここに載せ、奠文に附する。其の一にいう「八月の涼しい秋風が白幕を吹くころ、寢殿の門口の廊下で微之（の死）を痛哭した。今、妻子や親友が来て（洛陽で棺を前に君を）弔っているが、皆ただ、天はよくわかつておられない、というばかりだ」。其の二にいう「微之の」文章は（一時に）超絶し、生前は無敵であった。詩文の風格は靈妙であるから、死後も（君の）精神を伝えていくであろう。いま痛哭しつつ（君が）咸陽の北原に（埋葬されて行くのを）見送る。（遺恨を含みつつ亡くなった君だが）通例通り埃塵となれるのであろうか（なれるよう願つ

ている」。ああ、微之よ。我々の交際は、詩によって始まり、最後には、詩によって訣別することになった。(真の理解者を失い、我が) 絃も筆も、ともに断絶するのは、今日この日であろうか。

【六】 ああ、微之よ。三界の間において、生死しない者がいようか。四海の内において、朋友のいない者がいようか。しかしながら、他でもない私と君とが、永遠に別れることになろうとは。すでに逝去した君はどうしようもないが、まだ死ねずにいる私はどうすればよいのか。

【七】 ああ、微之よ。六十の老衰した翁(である私)が、心も灰になるほどに落胆し、血の涙を流しながら、酒を手にして再び(君の霊を) 祭り、棺を撫でて一たび呼びかける。仏典では「すべて業(人間の行為) が結びつくのは、因縁の集積でないものはない」というではないか。貴公と縁あつて此の世で出会えたことは、どうして偶然などであろうか。これまで何度も違う世に生まれ変わるなかで、幾度別れ、幾度出会ってきたことであろう。すでに今生(こんじょう)では別れることとなったが、どうして後生(ごしょう)での出会いが無いはずがあるうか。貴公はもう此の世に帰つては来ないが、私はきつと遠からず後を追つて往くことになるう。どうして形(本体) が立ち去つたのにその影だけはのこり、皮膚(基盤) が亡びてしまったのに毛だけは生育する、ということがあり得ようか。ああ微之よ。言葉もここに尽き果てた。どうかお饗け下さい。

## 五、語釈

【一】 ○歳次 歳星(木星)のやどり。歳星は十二年で天を一周し、一年に一次を行く。『左氏伝』襄公二十八年に、「歳は星紀に在り、玄枵に淫す」とあり、杜預の注に「歳は歳星なり」と。『文選』卷十、潘岳の「西征の賦」に「歳

は玄枵に次(やど)り、月は蕤賓に旅(やど)る」と。○中大夫・守河南尹・上柱国・晋陵県開国男・食邑三百戸・賜紫金魚袋 これらは白居易の官銜(肩書)である。中大夫は、品階の上下を示す文散官の一つで、従四品下。河南尹は、東都洛陽を治める河南府の長官。正員一名。従三品。職事官である「河南尹」の品階が、散官の「中大夫」のそれよりも高いため、「守」の字が加えられている。上柱国は、勲官で正二品。晋陵県開国男は、皇族や国家の功臣に与えられる爵号で、従五品上。食邑は、爵号に伴って与えられる領地。三百戸は、名目上の数に過ぎない。賜紫金魚袋は、特に紫衣を着、黄金で作った魚形の袋(金魚袋)を帯びるのを許可されていること。唐代、三品以上は紫衣を服し、五品以上は緋衣を着たが、その官位に及ばない者にも、しばしば賜紫・賜緋の挙があり、紫衣・緋衣を賜った。『旧唐書』卷四五、輿服志に「恩制に緋紫を賜賞し、例(おほむね)魚袋を兼ねしむ。之を章服と謂ふ」と。○清酌 清い酒。神に捧げる酒。宗廟を祭る際の酒。○庶羞之奠 庶羞は、もろもろの味の御馳走。庶は、衆。羞は、進。多くの珍珠美味を進献すること。『礼記』王制第五に「庶羞は牲を踰えず」と。奠は、葬儀の時に物を供える祭。○故相国・鄂岳節度使・贈尚書右僕射 亡くなった元稹の肩書。相国は、宰相の通称。鄂岳節度使は、武昌軍節度使(治は、湖北省武漢市)のこと。元稹は大和四年(八三〇)に檢校戸部尚書兼鄂州刺史・御史大夫・武昌軍節度使を授けられている。尚書右僕射は、右丞相ともいう。左僕射とともに尚書六部を統轄する。正員一名。従二品。死後に追贈されたので「贈」字を付す。

【二】○家積善慶 家が善事を積み重ねること。『易経』坤・文言伝に「善を積むの家には、必ず余慶有り、不善を積むの家には、必ず余殃有り」と。○粹和 純粹で穏やかな氣をいう。○国禎 国のさいわい。国祚(そ)。○人瑞 人事上のめでたいしるし。○行業 おこないとわざ。品行。○志略 こころざし。はかりごと。○政術 政治上のてだて。政治のやりかた。政道。『白氏文集』一五〇八「進士策問五道」第五道に「今、天子、方に天下の賢良政術



の士に策し、親しく利病(りへい)を訪ひ、以て元元を活かさんとす」と。○文華 文才。○四科 ここでは、孔門の四科のこと。德行・言語・政事・文学の四種の科目をいう。○全才 万能の才能。○将相 将軍と宰相。大将と大臣。将は、ここでは節度使のこと。○謨猷 はかりごと。国家の政策。○風声 土地風俗に随つて風化声教を立てること。よい風俗教化。『尚書』畢命に「淑慝を旌別し、厥の宅里を表し、善を彰し悪を瘞(や)ましめ、之が風声を樹てよ」とあり、伝に「其の善風を立て、其の善声を揚ぐ」という。又、『左氏伝』文公六年に「古の王者は、(中略)並に聖哲を建て、之が風声を樹て」とあり、杜預の注に「土地の風俗に因りて、為に声教の法を立つ」という。○蕃方 未開の国。蛮人の国。蛮国。『詩経』大雅「抑」に「用て戎の作(おこ)るを戒め、用て蕃方を遯(とほざ)けよ」とあり、鄭箋に「蕃方とは、蕃畿の外なり」と。○功利 ここでは、功績と利益、或いは、幸福と利益をいう。○夷夏 夷狄と中国。異民族と漢民族。○蒼生 人民。あおひとぐさ。蒼蒼と茂る草木のように衆(おお)い民をいう。『書経』益稷に「光(広)天の下、海隅の蒼生、万邦の黎猷に至るまで、共に帝の臣惟(た)り」と。黎猷は、黎民(庶民)中の賢者。○詩云「淑人君子、胡不萬年」『詩経』曹風・鳴鳩に「淑人・君子、是の国人を正す。是の国人を正す、胡ぞ万年ならざらんや」と。淑人は、善人。鄭箋に「能く人に長たれば則ち人其の寿考を欲す」と。○又云「如可贖兮、人百其身」『詩経』秦風・黃鳥に「彼の蒼たるものは天、我が良人を殲(つく)せり。如し贖ふべくんば、人其の身を百にせん」と。○賢良 かしこくて善良な人。すぐれて賢い人。○情理 人情と道理。○憤痛 いきどおりいたむ。○號呼 呼びさけぶ。大声で呼ぶ。

【三】 ○貞元季年、始定交分 交分は、交際の本分。まじわり。つきあい。白居易と元稹は、貞元十九年(八〇三)に同時に科擧の書判拔萃科に合格しており、交際が始まったのは、その前年(貞元一八年・八〇二)頃からと推定される。○行止 行くと止まる。動静。出処進退。○通塞 通ることとふさがること。境遇の順調なものと難渋な

こと。運の開けることと開けないこと。幸と不幸。窮通。○金石 かねといし。堅いもの、永久不変のものたえ。「金石の交わり」は、金石のように堅く決して心変わりしないまじわり、堅固で破れない交わり、をいう。○膠漆 にかわとうるしのように交際の緊密なたとえ。『韓非子』安危に「堯は膠漆の約無けれども、当世に於て道行はる」と。○死生契闊 死ぬも生きるも苦勞を共にすること。『詩経』邶風「擊鼓」に「死生契闊、子（し）と説（ちかい）を成せり、子の手を執りて、子と偕（とも）に老いんと」と。○爵祿 爵位と秩祿。○患難 難儀。うれへ。苦しみ。○寤寐 目覚めることとねること。寝ても覚めても。『詩経』周南・関雎に「窈窕（えうてう）たる淑女は、寤寐に之を求む」と。○憂思 うれえる心。また、うれえ思う。『礼記』儒行に「儒に（中略）其の憂思此くの如き者有り」と。○誓心 心中に誓いを立てること。ここでは、誓いの内容をいう。○同帰 帰着するところを同じくする。同じ所に行く着くこと。『易経』繫辞下伝に「天下、帰を同じうして塗（みち）を殊にし、致を一にして慮を百にす」と。○交感 双方が相まじわって、互いに感じ合うこと。○文翰 文書。文章筆墨。ここでは、作品のこと。翰は、筆の意。筆墨に関するものをすべて文翰という。

【四】○左丞 尚書左丞のこと。尚書都省に属し、尚書右丞ともに省事を管轄する。総理府次官。正員一名。正四品上。○自越過洛 越は、越州のこと。今の浙江省紹興市。洛は、洛陽のこと。元稹は、長慶三年（八二二）冬に、御史大夫・浙東觀察使・越州刺史となり、越州にて六年近くを過ごした。その後、大和三年（八二九）九月、尚書左丞を授けられ、長安へと向かう途上、洛陽に留まり、白居易と会った。○醉別 酒宴を張って見送る。○悲吒 悲しみ歎く。吒（た）は、歎く際の声。○留連 去るに忍びず、ぐずぐずしているさま。○徒侶 朋輩。仲間。同伴者。○自識君来三度別 「三度別」とは、①元和十年（八一五）三月二十九日、通州司馬に出される元稹を長安近郊の澧水（渭水の支流）で見送った時、②元和十四年（八一九）三月、夷陵（湖北省宜昌県）にて元稹と出会い、三宿して

別れた時、③長慶三年（八二三）十月、越州（浙江省紹興市）に赴く元稹を杭州で見送った時、をいう。○後迴 次回。後にまた出会う機会。○髭鬚 口ひげとあごひげ。または、単に、ひげのこと。○涕零 涙の落ちること。『詩經』小雅・小明に「彼の共人を念ふ、涕零ちて雨の如し」と。○中心 心のうち。心中。中情。○惕然 おじおそれるさま。『列子』黄帝に「怛然として内熱し、惕然として震悸す矣」と。

【五】○捐館 やかたをすてる。逝去することをいう。『戦国策』趙策に「今、奉陽君は館舎を捐（す）つ」と。○鄂 鄂州のこと。治は、湖北省武昌県。元稹は大和四年（八三〇）一月、檢校戸部尚書を授けられ、御史大夫・武昌軍節度使・鄂州刺史となり、翌大和五年（八三一）七月二十一日、武昌にて死去した。○悲訃 悲しい死の知らせ。悲しい訃報。凶報。○萬感 多くの感慨。いろいろの思い。○前篇 前の篇。以前の作品。大和三年（八二九）に洛陽で再会し、別れに臨んで元稹が詠じた先掲の二首を指す。○覆視 くりかえして視る。何度も照合する。覆は、くりかえす。○詞意 言葉の意味。辭意。○魄兆 たましいのきざし。○哀詞 哀辭ともいう。文体の名。古くは夭逝した者を悼む際に用いたが、後には、寿命を全うした者にも用いた。多くは韻文の形式をとる。○奠文 祭奠の文。「奠」は、物を供えて祭ること。喪葬の時に物を供える祭をいう。○寢門 寢殿の門。輿御殿の門。○妻孥 妻と子。○皇天 天の敬称。また、天の主宰神。○卓犖 卓越してすぐれること。超絶。『後漢書』卷四〇下・班固伝に「方州に卓犖たり、要荒に羨溢たり」とあり、注に「卓犖とは、殊絶なり」と。○風骨 文章の骨格。詩文の風格。○精靈 すぐれて靈妙な氣。宇宙万物の本体。○咸陽 古の秦の地。今の陝西省長安県の東。○埃塵 ほこり。ちり。塵埃。○絃筆両絶 琴の絃と、筆を、ともに絶つこと。「絶絃」は、真の理解者（知音）を失ったために、琴の弦を断ち切った伯牙の故事に拠る。ここでは「絶筆」も同じ意味に用いる。『呂氏春秋』卷十四・孝行覽・本味に「凡そ賢人の徳は、以て之を知るもの有ればなり。伯牙琴を鼓し、鍾子期之を聴く。……鍾子期死するや、伯牙琴を破り弦を

絶ち、終身復た琴を鼓せず。以爲へらく、世に復た為に琴を鼓するに足る者なし、と。独り琴のみ此の若くなるに非ず、賢者も亦た然りと。

【六】 ○三界 仏教で、一切衆生の生死輪廻する三種の世界をいう。欲界と色界と無色界。また、過去・現在・未来のこと。○四海 四方の海の内。天下。○交朋 朋友。友人。○終天之別 永遠の別れ。永訣。「終天」は、此の世の終わりまで。とこしえ。永久。○既往 すでに過ぎ去ったこと。すんだこと。過去。

【七】 ○灰心 冷灰のように心が意気沮喪してふるわないこと。失意の極み。○血涙 血のなみだ。○仏経 仏教の經典。○凡有業結、無非因集 およそ業（人間の善悪の行為）が結びつくのは、すべて因縁の集積によらぬものはない、の意であろう。○縁会 諸縁の合すること。ここでは、互いに出会うことになっていた宿縁をいう。○多生 生死を重ねて幾度も生まれ出ることという仏教語。六道を輪廻して多くの生を経ること。○後期 後日に会う時。ここでは、後生での出会いをいう。○不帰 かえらない。転じて、死ぬこと。○安有形去而影在、皮亡而毛存者乎 『左氏伝』僖公十四年に「冬、秦饑（う）う。糶（てき。輸出米）を晋に乞はしむ。晋人与へず。慶鄭曰く「施（し）に背くは親無きなり。災を幸とするは不仁なり。愛を貪（むさぼ）るは不祥なり。鄰を怒らすは不義なり。四徳皆失はば、何を以て国を守らん」と。糶射（くわくせき）曰く「皮の存せざる、毛將（は）た安くにか傳（つ）かん」と。糶射のセリフは「皮（≡土地）が無ければ、毛（≡輸出米）のつき場所があるまい」という寓意。転じて、事物は、その基礎を失っては存在できないことの比喩に用いる。○尚饗 祭文の末尾に用いる常套句。『儀礼』士虞礼に「卒辞に曰く、哀子某、来日某、爾（なんぢ）を爾の皇祖某甫に隣（のぼ）せ耐せんとす。尚はくは饗けよ」と。

※本稿は科学研究費補助金（基盤研究（C）課題番号…二一五二〇三七八）の助成を受けた研究成果の一部である。